

看護未来塾世話人所感

2021. 1. 1.

中島紀恵子

新型コロナ急拡大が続く新しい年の始め、一日も早い終息を祈るばかりです。昨年の私の1年は、自粛というよりは塾居に近い日常でした。そんな中で、コロナに関係する読み物や記事の切り抜きだけが増え、色んな言葉に惑わされて收拾がつかない、そんな日々だったように思います。ところが、あと数日で2020年が終わる日、朝日新聞11面の全面広告(2020.12.29)『誰もが誰かのエッセンシャルワーカーだ』が目飛び込んできました。読んだ方も多いと思いますが、with COVID-19の支柱をなすことのように思えますので、引用させていただきます。

『命を守る』ということは、ただ生きるためだけの暮らしを知るということだろうか。今年、不要不急と呼ばれたものだって、生きる上では必要だった。好きなもの。楽しいと思える瞬間。心地いい暮らしをつくるもの。新しい場所。私たちは、そこではたらく全ての人を称えたい。全ての仕事が必要不可欠で、あなたの存在は、必ず誰かの支えになっていた。」だから、ありがとう、…に続いて医療職のみなさんを先頭に484ものワーカーの職業がランダムに併記されていました。これにお隣さんからパートナーまでを加えて丁度500。最後の“あなた”をプラスして501もの(数え間違えがなければ)“誰もが誰かにとって欠くことのできない大切な人”が並びます。なんだかエールをもらった気分です。しかし、このメッセージが、COVID-19を流行らせたコロナ危機によって現代社会の政治、経済、文化などが抱え込んでいる環境そのものの脆弱性を、多くの人に分かりやすい形で視えたところの位置から発せられているのなら、このような弱さがどこからきているのかを問うておくことも意味あることに思えます。

事は、2020年1月7日(以下年号を省略)、中国政府が新型コロナウイルスを検出したと公表しとことから始まります。23日から武漢市は都市封鎖に。その2日後の25日から始まった方方(ファンファン)さんの封鎖下60日間のブログ「武漢日記」¹⁾は、街中がパニックに陥った状況の描写、医療の最前線に立つ看護師や医師の犠牲と死者の無念さへの想い、また団地の住民たちがチャットやアプリを使って野菜や肉の共同購入食材や料理を調達したり、届けたりする様子や、路上を毎日黙々と清掃して住民の心を落ち着かせてくれた清掃員の姿の描写など、「何処の国の住民もおんなじだな〜」などとほっとする感に浸る記述もあれば、文明を測る基準は、高いビルや強力な軍隊ではなく、国の弱者に対する態度だ、とか、行政府幹部の無責任ぶりに対する厳しい批判もあり、方方さんの書くことに対する覚悟と胆力に感服させられました。

この武漢から206人の日本人を乗せたチャーター機が羽田空港に着いたのが、1月19日。その数日後の2月5日に、日本の過疎地域の平均人口よりも多い乗客乗員を乗せて横浜港に停泊中のダイヤモンド・プリンセス号に、10名の感染者が出たことが発表されました。連日、このウイルスの正体や飛沫感染経路対策の難しさは、社交空間と業務空間と個室空間と移動空間が継ぎ目なく繋がる巨大船のゾーニングの仕方にあること、そして、防護具の圧倒的な不足などが報道されるようになりました。

私の関心は、どちらかといえば、このウイルスの特異性といったことよりも、この巨大豪華客船が経営として成り立つ市場社会の方にありました。今日では、何艘もの、旅を楽しむ目的だけに造船された巨大豪華客船があるそうですが、昔も今も乗客乗員は、己の国の政治経済、文化の影響を受けた様々な人種でしょうし、それぞれの物語りをもった人でしょう。この巨大豪華客船が、次の何週間かの寄港までに必要な食料や生活物資を調達あるいは破棄し、運搬するシステムの精緻な仕組みは、私

の想像を超えることです。しかし、今日的な消費市場の構造からみて乗客は、至れり尽くせりのサービス提供による日常が、“飽きない装置の数々に飽きる”（これは私の想像です）事があっても、与えられた船室に“籠る”程度の自由しかない。いつ下船しても OK ではない不自由を約束して、非日常を楽しむことを契約したのですから。このように考えると、この巨大豪華客船のコロナとの闘いは、いま、世界中の人達が自粛を余儀なくされている暮らしの構造の縮図のように思えてなりません。

そんな訳で、沢山の付箋が貼られたまま本棚に晒されていた、伝染病の歴史的伝記を 40 年ぶりに拾い読みをしたのでした。本のあとがきには「生物は（人間を含めて）、決して現在の姿をとどめることなく、自然の法則に従って、生命がある限り、絶えず変化している。だからこそ、我々が観察する伝染病というものも、ただ、“あるがままの発現”ではないし、また、“現代の化石”でもあるはずがない。少なくとも、“起っていた姿”と“起こるであろう姿”の移行段階であり、現時点での姿は、過去の像と将来の像の一接点での現象と考えなければならないであろう」と書かれています。この一文が、3 月 11 日、WHO が新型コロナ「パンデミック」を認定したことを意味づける助けになりました。

私が、この新型コロナの怖さを自分事として実感したのは、陽性者に対する徹底した疫学的追跡とその公表の方法と、志村けんさんの急逝（3 月 29 日）に至るまでの急激な重症化の様相と肉親が遺骨の入った箱で再会するしか叶わないという痛ましい現実と直面した頃からです。古代から、死者の生きてきた証しを家族代々の記憶に納める「弔い」の儀式を持たない国は無いそうです。それを思うと、遺骨になった箱と初めて対面する家族の無念はいかばかりかと、戦死者の遺族の尽きることのない想いに重ね、その辛さが身に沁みました。

この時の日本の累積感染者数は、まだ 1,866 人、世界の感染者数は既に 477,368 人。ひたひたと拡がる感染増大に、防御できる器具機材の用意が不足する国中の焦りに平行して、巷の空気は、陽性者がどこそこに出たとの噂、そこから始まる詮索がクラスター発生の別なく、医療現場を支える職員への謂れのない誹謗中傷、風評が始まりました。個人や組織が受ける被害は、リアルであり具体的です。だから、もしかすると、しなくてもいい過剰な警戒や防衛に向かって対処しがちです。4 月の中頃から、病院や高齢者介護施設、それに関連する認知症対応のグループホーム、更に障がい者施設のクラスターの発生が報告されるようになりました。そこでは、入院病床がなかなかみつからない問題、認知症の人の場合は入院を断られるという事態、施設ゾーニング、バックグラウンドの異なるメンバーの教育のあり方、入居者の多様な状態の対応を決断するリーダーシップに関わることなど、多くの問題に直面することになりました。この状況の中で、風評が広がり、そこに働く従事者の士気の低下が退職を促し、結果、居住仲間が集うプログラムの停止や介護職との接触頻度の減少、それに起因して、居住者の生活不活発や ADL が低下するという悪循環。それに拍車をかけたのが、洗濯や清掃、ゴミ収集業者の出入りなど、セーフティーネットがスムーズに働かないという実態が、少しずつ浮上してきました。大多数の施設が、感染者の発生を怖れて、家族の面会を厳しく制限するようにもなりました。看取り期にも、接触を禁じざる措置を取っている実態も分かってきました。

セーフティーネットの代表格といえば、貧困と住居対策です。東京都のハウジングブア（住まいの貧困）は、コロナ禍以前からあった問題だといいます。生活困窮者の支援団体「一般社団法人 つくろいファンド」の活動報告によれば、4 月 7 日に発出された緊急事態宣言によるネットカフェ各店舗の休業要請で、そこに暮らしていた約 4,000 人の人間が行き場を失う事態に直面したといいます。それ以外にも雇止め、解雇、休業による減収や、建設土木業、飲食店、性風俗等の人たちも収入減少で家賃を払えず、住居喪失の危機にあるということです。「つくろいファンド」の支援メンバーが緊急事態宣言の日以降にブログに綴った日記をアップして出版されたこの本³⁾には、所持金数十円しかない若者たちの側らで、食べることに、住まう場所を探すこと、スマホ使用料滞納者への新しい通信の手段を手

当てしながら、この事態の支援を担う唯一の公的窓口である福祉事務所にも、時に寄り添うといった支援、時には当事者の生活の緊急性を理解しない態度や規則に精通していない不勉強な相談員との攻防が熱く、生き生きと活写されています。そして、コロナ禍の最中にも平時の「慣習」から一歩も抜け出ない、政策主体の側や執行する「窓口」の問題の指摘も。しかし、これは、福祉事務所だけの問題ではないでしょう。

7月に入った頃から医療危機に備えて「3密」を訴える報道に合わせて、急性期病棟で療養する重症者の痛ましい姿や、防護衣を纏った医療チームの活動の姿が映し出される機会が増えてきました。私たち看護職の仲間には、そこに映っている人の7・8割は、看護師だろう事は想像できます。しかし、よく分からない。だから知りたい、と思いました。言うまでもなく、看護師本来の「心・技・知」は、人の身体に触れて人の生命のもてる潜在力をはかる（図る、測る、計る、量る、謀る、諮る）ことを持続できる環境の影響を強く受ける「しごと」です。故に、私たちが本当に知りたいこと、それは、この非常時の急性期病棟の環境の過酷さに対応した任務分担や、病棟内に留まる時間などの配慮などが、公正、公平に為されているか、というようなことです。その様に「事」の事実と真実を求めるなら、ケアに関わる全ての人の「事」の分かち合いが、より大事になります。

このコロナ禍の時代に露わになってきたと思えるものを、私なりに整理してみました。

第1は、世の中の事実といわれる出来事には、判然としないことが沢山あることを再確認する必要があります。専門性の別を問わず、不測不能なものに向き合う「わざ」が下手になってきているように思うからです。そのことが科学的検証や「通達」といったものに過剰な期待をする、その様な依存あるいは固執、そういう態度の偏りが、もしかすると分断を引き起こしやすいかもしれないと思うのです。

第2は、今までの国境や民族文化の違いといった分断されていたものが、水平化され、自分達の生活が世界の現状と地続きであるといった感覚を深められたということ。それによってもマイノリティーの命の格差、医療の格差、働く場や働く手段の格差、教育の格差、貧富を中心に起きているこのような分断が、より鮮明になってきたと思います。

第3は、専門家・非専門職を問わず、感染者数や死者数、映像などの具体データを前に、自分の身体と向き合うこと、また死を身近に思う機会が増えたことなどです。

最初に引用した「誰もが誰かのエッセンシャルワーカーだ」は、この数十年、私たちを支配してきた、自己責任、競争、成果、生産性（生きる価値に直結するような）、セーフティーネットを支える人員カット等々の冷たい社会の構造が、生活基盤の脆弱性、つまり誰もが誰かのケアの担い手であり、特別の人だ、コロナ後、最も大事なものは“そこでしょう”、という表明のように私は受け止めました。私たち看護職においても、こんな、水平感覚をもってみんなを支え支えられている、そんな「普通」の活動のあり様やあり方を考えていくことが大事になるな〜と、改めて思いました。

参考図書

- 1) 方方(著), 飯塚容・渡辺新一(訳):「武漢日記」, 河出書房新社, 2020.
- 2) H.ジンザー:「ねずみ・しらみ・文明―伝染病の歴史的伝記」みすず書房, 1966.
- 3) 稲葉剛, 小林美穂子, 和田静香(編):「コロナ禍の東京を駆ける: 緊急事態宣言下の困窮者支援日記」, 岩波書店, 2020.